



和's YAMATO

(わづやまと)

2021
秋号

- 写真で楽しむ群馬の自然 「諏訪峠の紅葉」
- 産業遺産紹介 「敷島淨水場 旧配水塔」
- シリーズ群馬の芸術家 「岩崎義治」
- 郷土史跡めぐり 「探廻り古墳群」
- 神田神社 宮司 清水祥彦氏

日本近代経済の基礎を築いた巨人 濵澤栄一



「森にやどる」(ムラサキシキブの実り) F6号 須藤和之 画
ヤマトビオトープ園にて



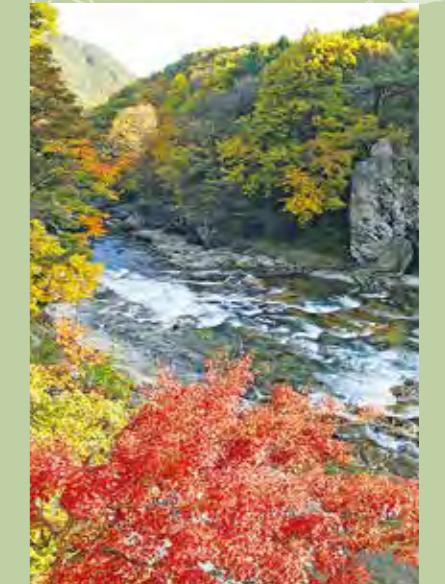
写真で楽しむ 群馬の自然



諏訪峠の紅葉と利根川の流れ 「ググっとぐんま写真館」から転載



「ググっとぐんま写真館」から転載



「ググっとぐんま写真館」から転載

諏訪峠
群馬県利根郡
みなかみ町湯原

諏訪峠は水上を代表する奇岩、怪石が連続する渓谷で、約2.4kmの遊歩道があります。遊歩道内では、利根川の清らかな流れと、吊り橋の笹笛橋、高さ30mの玉簾(たますだれ)の滝、紅葉公園などが見どころです。笹笛橋から眺める谷川岳は絶景です。

須藤 和之 Kazuyuki sutoh プロフィール PROFILE

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業 2007年 東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復日本画修了 2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得 博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展(画廊翠巒)(同2011~20) 2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011~21) 2013年 アーツ前橋開館記念展「カゼイロノハナ・未来への対話」出品、群馬銀行創立80周年記念 収蔵作品「群馬の四季」制作、慶應義塾大学非常勤講師(2013-2020) 2014年 個展(日本橋三越本店) (同2017,20) 2017年 群馬県展 県知事賞 2016年 個展(株式会社ヤマト) 2019年 高崎市タワー美術館トップランナーⅢ出品 2020年 上毛芸術奨励賞受賞 現在 日本美術院院友
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET URL: <http://sutooo.net/>



和's YAMATO

秋号 2021 (第50号)

【和's yamato】の由来

ヤマトの漢字の「和」、Water&Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和's YAMATO 秋号 2021年(令和3年)9月発行

発行:株式会社ヤマト(広報室)群馬県前橋市古市町118 tel:027-290-1891 fax:027-290-1896

建設プロダクト 

株式会社ヤマト 群馬県前橋市古市町118 〒371-0844 TEL.027-290-1800(代) FAX.027-290-1896

支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北 営業所/軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、新潟、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、滋賀、青森

附属施設/大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター

ヤマトホームページ www.yamato-se.co.jp/



日本近代経営の基礎を築いた巨人 渋沢栄一

渕沢栄一は天保十一年（八四〇）に現在の埼玉県深谷市血洗島の農家に生まれました。

幕末の二十代は攘夷・倒幕計画に加担するものの、計画がとん挫した後に「橋家(当主、徳川慶喜)家臣となり、慶応二年(一八六七)に西欧先進諸国を歴訪しました。明治二年(一八六九)二十九歳で明治政府に出仕し、明治六年(一八七三)三十三歳で退官した後、経済界に身を投じます。銀行、証券、海運、鉄道など、五百社以上にのぼる企業の設立に関わつたといわれ、晩年は社会貢献活動を精力的に取り組んだ偉大な実業家です。

明治政府の大藏省で活躍

明治新政府の力萬葉と洋路
渋沢栄一は明治二年（一八六九）十一月、明治新政府から出仕を命じられ、国の政策立案に関与します。慶應三年（一八六七）に渡欧して外国の金融制度に接した渋沢は、民部省（後の大蔵省）の官僚となり、税制の立案などに関与しました。明治五年（一八七二）、三十二歳の時には、現在の事務次官の地位にあたる少輔（しょうゆう）に昇進し、手腕を發揮しました。大蔵省では、大輔（たいふ）に抜擢された長州藩出身の井上馨とともに、富岡製糸場の設立など国営事業に

—実業界に転身し商工業振興に尽力

—実業界に転身し商工業振興に尽力

渋沢栄一や井上馨は、民間企業を振興し、産業の発展につなげる考え方を持つていましたが、明治政府で大きな権力を持っていた大久保利通は、国営企業

の育成を主眼にしていました。また大久保は、旧幕臣が明治政府の要職に就くことには反対しており、栄一の活躍を快く思つていなかつたこともあり、栄一にとつて仕事がやりづらくなつていました。栄一は大蔵省を辞し、在野の立場から日本経済をけん引します。

明治六年（八七三）六月、栄一は第一国立銀行の設立に携わります。ヨーロッパを視察した際、商工業の発展には資本を集めて企業家を支援する銀行の存在が大きな役割を果たすと考えていた栄一にとつて、国内初の銀行設立は感慨深いものであつたと思われます。

銀行設立に参画した後は、明治十一年（八七八）に東京商法會議所（現・東京商工会議所）の初代会頭に就任し、製紙、保険、郵船等の企業設立に関与しました。その後、様々な事業に参画し、日本は欧米列強に追随する近代国家として成長します。明治二十二年（八八九）

丨 晩年は社会貢献活動を行ふ



誠之堂(せいしどう)。大正五年(一九一六)、栄一の喜寿(77歳)を記念して、栄一が頭取を務めた第一銀行の行員が、出資して建てられたレンガ造りの洋館。東京にあつたが、平成十一年(一九九九)に深谷市に移築された。国的重要文化財。(写真提供: 深谷市)

青天を衝け・明治編 主な登場人物

第60作 NHK 大河ドラマ「青天を衝け」
日本資本主義の父・渋沢栄一の生涯を描く

主人公

渋沢栄一(篤太夫)・吉沢亮

一橋家

一橋家当主のちの将軍徳川慶喜・草彌剛

慶喜の正室・美賀君・川栄季奈

栄一の従兄 渋沢喜作(成一郎)・高良健吾

一橋家家臣川村恵十郎・波岡一喜

慶喜の弟徳川昭武・板垣李光人

実業界

三菱商会創立者岩崎弥太郎・中村芝翫

三井組番頭三野村利左衛門・イッセー尾形

先収会社副社長益田孝・安井順平

小野組番頭小野善右衛門・小倉久寛

血洗島

渋沢家・中の家

栄一の父渋沢市郎右衛門・小林薰

栄一の母渋沢ゑい・和久井映見

栄一の妻渋沢千代・橋本愛

栄一の娘渋沢うた・小野莉奈

尾高家

栄一の従兄尾高惇忠・田辺誠一

惇忠の娘尾高ゆう・畠芽育

その他

大阪の女中・大内くに

駿府藩中老・木場勝己

茶問屋萩原四郎兵衛・田中要次

明治政府

大蔵少輔伊藤博文・山崎育三郎

渋沢栄一関係年表(満年齢)

		天保11年(1840)
2月13日、武蔵国榛沢郡血洗島村の豪農渋沢		
市郎右衛門の長男として生まれる		
嘉永6年(1853)13歳		
6月3日、ペリー来航		
安政5年(1858)18歳		
6月19日、日米修好通商条約締結		
12月、下手計村の千代(尾高惇忠の妹)と結婚		
万延元年(1860)20歳		
3月3日、桜田門外の変		
文久元年(1861)21歳		
春、江戸に出府。		
文久2年(1862)22歳		
1月15日、坂下門外の変		
文久3年(1863)23歳		
春、江戸に再出府し、横浜居留地焼き討ちを		
準備する。8月18日の政変		
元治元年(1864)24歳		
2月9日、喜作(成一郎に改名)とともに一橋家		
に仕官		
慶応3年(1867)27歳		
1月11日、清水徳川家当主昭武に隨行してヨ		
ーロッパ諸国を歴訪。大政奉還		
慶応4年(1868)28歳		
11月3日、ヨーロッパから帰国		
12月23日、静岡城下で慶喜に拝謁		
明治2年(1869)29歳		
10月18日、政府から出仕を命じられる		
明治6年(1873)33歳		
大蔵省を退官		
6月、第一国立銀行総監役となる		
明治33年(1900)60歳		
男爵受爵(のちに子爵)		
昭和6年(1931)91歳		
永眠		

神社仏閣から 歴史を学ぶ

神田神社 宮司 清水祥彦氏

徳川氏発祥の地・世良田（群馬県）と神田神社（神田明神）

神田神社（神田明神）は、江戸総鎮守として、徳川幕府を守護する神社で、鬼門の方位に配置され、江戸を守る重要な役割を担っていました。

インタビュー 木下直也

江戸の鬼門封じ神田神社と寛永寺

神田神社（神田明神）は、徳川家の江戸総鎮守となっています。江戸城、現在の皇居から見て、丑寅といわれる方向、北東にあたるのですけれど、その鬼門封じの神様ということで、神田明神と、上野の寛永寺さんが配置されました。一方、裏鬼門といいまして、未中、南西の方向には、赤坂の日枝神社さん、芝の増上寺さんが配置されたんですね。鬼が入って来ると一番恐れられたラインに、神田明神を配置したのです。また、神田神社では、平将門公をご祭神としてお祀りしており、鬼門封じの守護神として将門公が鎮められたという歴史があります。

徳川家発祥の地とされる群馬県・世良田

徳川家の発祥は、と問われると、愛知県の三河とお答えになる方が多いと思いますが、群馬県の方は、群馬の世良田の郷こそが新田氏から連なる徳川家発祥の地とされ、その歴史を大切にされていることと思います。世良田の新田氏から始まった徳川氏が、三河にいき、江戸にいたという流れがあるかと思います。そして神田明

神が徳川家の守護神になりました。目に見えない糸に結ばれているように感じます。

世良田から三河にいくまでの間、当時の松平氏、徳川の祖先たちは、お坊さんとして遊行（ゆぎょう）という全国を行脚する修行をされていたということです。一遍上人が主宰した教団の時宗には、室町時代に徳川氏の先祖が上野国から三河国へ逃れてくる過程で、遊行上人の援助を得たという伝承があります。

神田明神発祥の地、大手町将門塚に将門公の御靈を鎮めたのは、時宗の僧侶でした。何らかの形で、時宗のネットワークと、神田明神、徳川家が目に見えない糸つながつて、世良田の郷から始まった徳川家が日本を支配する江戸という巨大都市を作り、その江戸の守護神が神田明神であり、大切にされてきました。群馬の皆様と神田明神の関係性を解く上で、深いご縁が重なり、今に至っていると感じています。世良田の新田氏の一族がいらっしゃなければ、神田明神が江戸総鎮守になつて大きく発展することは無かつたといえると思います。

神田神社宮司 清水祥彦（しみずよしひこ）氏

昭和21年（1946）に創建し、約1300年の歴史を持つ神社です。はじめは現在の千代田区大手町の将門首塚周辺に鎮座していました。慶長八年（1603）に徳川家康公が江戸に幕府を開いた時に、幕府の命令によって現在地に移転しました。江戸城周辺には掘割が造られ防備を固めていますが、その中で特に重要視されたのが鬼門の方位で、神田明神と寛永寺が配されました。幕末の戊辰戦争で、幕府方の彰義隊が最後に守ったのが寛永寺でした。幕府の盛衰に大きく関わっていたのが、鬼門に配置された神社仏閣だったのです。



神田神社（神田明神）の御神殿
権現造。鉄骨鉄筋コンクリート・総朱漆塗の社殿。

ご祭神：一の宮 大己貴命（おおなむちのみこと・だいこくさま）
二の宮 少彦命（すくなひこなみこと・えびすさま）
三の宮 平将門命（たいらのまさかどのみこと）。

神田、日本橋など東京中心部10~8町会の氏神様。明治時代には明治天皇が親し、ご参拝し、皇居・東京の守護神として仰がれる。平将門命は明治7年に攝社に遷座されたが、昭和59年に神田明神三の宮ご祭神に復座された。

〒101-0021 東京都千代田区外神田2-16-2



隨神門
昭和50年に昭和天皇御即位50年の記念として建立
総檜・入母屋造



徳川氏の先祖と遊行上人

時宗總本山遊行寺の宇賀神は、徳川家の祖先、得川有親（ありちか）公の守り本尊といわれ、有親公は遊行十一代尊觀上人の弟子となり名を徳阿弥（とくあみ）と改めた。応永三年（1369）に徳阿弥は、宇賀神に子孫繁栄を願ったという。清和源氏・新田氏の流れをくむ有親公は、南朝方に加勢したため、武士としては不遇の身で、遊行僧となり諸国をめぐった後に三河国の松平郷に落ち着いた。有親公から数えて九代目の子孫が家康と伝わる（諸説あり）。徳川家は遊行寺に寺領百石と伝馬朱印状（馬50疋の徵發權・大名並みの扱い）を与えて手厚く保護した。

参考資料：ふじさわのしまポータルサイト

平成30年（2018）に開業した神田明神文化交流館
EDOCO
コンセプトは「伝統×革新」。神社としての伝統文化を継承しつつ、新しい文化を発信する施設。多様性の受け皿として、アーティスト・ダンサーなど若者向けの催しも行われる。

塚廻り古墳群

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 専門員(主任) 石川 真理子

築造当時の姿を残す古墳の発見



古墳公園として整備された塚廻り古墳4号墳



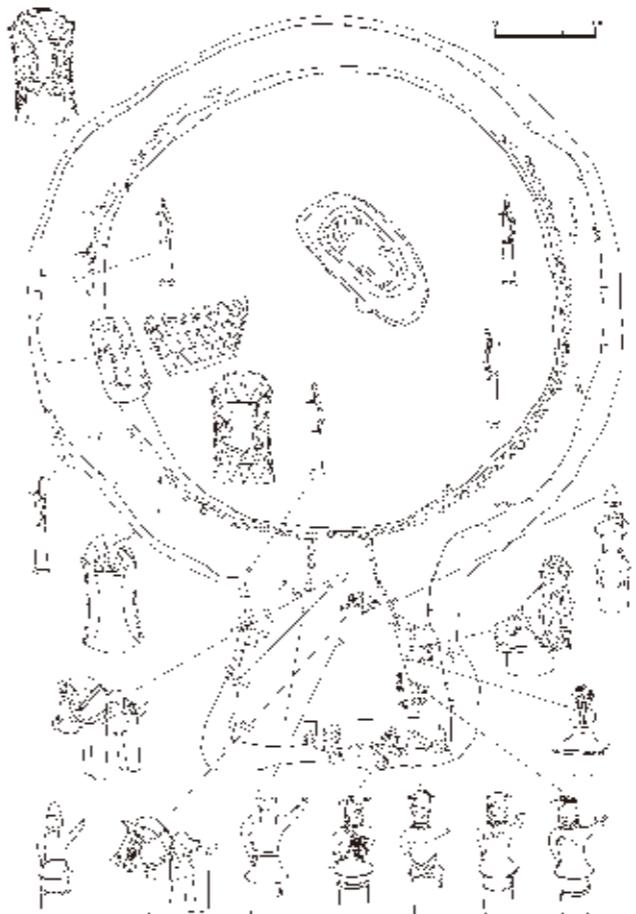
埴輪のレプリカが並ぶ前方部。飾り馬をはじめ、埴輪が立ち並ぶ。



前方部に置かれた埴輪は築造当時の様子が再現されている。



古墳公園の入り口にある石碑
後に植えられた木は、古墳公園の目印になっている。



4号墳形象埴輪出土位置図

塚廻り古墳群は、太田市南東部に位置し、大泉町、邑楽町、栃木県足利市と隣接している龍舞町にあります。標高は25～35mで、旧渡良瀬川の氾濫原に残された緩やかに傾斜する低台地の上に造られています。現在は平坦な水田地帯が広がっています。

昭和52年に圃場整備事業による用排水工事の最中に、大量の埴輪が出土しましたことがきっかけで発見されました。それまでは、「古墳はない」と言っていた地域でした。

3号墳と4号墳からは円筒埴輪列が発見され、その成果は新聞等に報道され、県内外から調査現場に多くの見学者がつめかけ、注目を集めることになったのです。

削平が進んでいた1号墳、3号墳、4号墳の3基を昭和52年の冬に、急遽、発掘調査することになりました。塚廻り古墳群のなかでも築造当時の姿を一番よく残していたのが、塚廻り4号墳です。全長22.5m、後円部径17.7m、周溝幅

これらの埴輪は6世紀初頭～中ごろに作られたとみられ、墳丘上の配置状況が明らかとなりました。時代文化の光明に欠かせない資料です。

平成23年には、4号墳の西側と南側が太田市教育委員会によって発掘調査が行われました。弘仁9年(818年)の大地震に伴うと推定される洪水層が確認され、この洪水層に埋まった形で、遺構が検

出されました。この調査では、4号墳の周囲に多くの古墳が造られていたことが明らかになりました。12号墳の周溝内からは、古墳時代の土器が22個体まとまって出土しており、隣の古墳で全く異なった祭祀が行われていた可能性があり、注目されます。

出土した埴輪は、昭和60年6月に国の重要文化財に指定されました。群馬県立歴史博物館と群馬県埋蔵文化財調査センターで保管・展示されています。また、塚廻り古墳群の4号墳と3号墳の一部は、「塚廻り古墳群第4号墳」として群馬県指定史跡に指定されました。現在、古墳公園として復元整備されています。

塚廻り古墳群は、県道前橋館林線の龍舞十字路を県道足利千代田線の足利方面に入る。国道122号線を越え、東部木材卸センター手前を北上すると、右手にフェンスで囲われた場所が見えます。田園風景の中に古墳が現れますので、是非一度、見学してみてください。

参考文献
・「塚廻り古墳群」 1980年 群馬県教育委員会
・「太田市史」平成8年 太田市編
・「塚廻り古墳群パンフレット」 平成24年 太田市教育委員会

岩崎義治

生誕百年、「汝は山河と共に生くべし」

美術研究家 染谷滋

株式会社ヤマトと岩崎義治

株式会社ヤマトの本社ギャラリーが誕生したのは、一九九三(平成五)年四月の新本社ビル竣工のときに遡る。まだ社名が大和設備工事株式会社だった時代である。その最初の展覧会が岩崎義治個展だった。

ヤマトが所蔵する岩崎義治の作品は数多い。百号の大さの『トレド風景』は、遠景の中心に大聖堂を配し、複雑に建ち並ぶ石造りの街並みを、丹念かつ重厚に描き切った力作で、一九六八(昭和四三)年の日展に入選した作品。赤城山を描いた作品では季節による違いが鮮明で、『夏雲』や『雪の赤城山』などは、その季節になると必ずまた見たくなる作品だ。何点かの『夕顔』や『秋果』などの静物画も忘れ難い。

秀作揃いのこれらの所蔵品は、岩崎義治とヤマトとの関係の深さを物語っている。

七転び八起きの人生

岩崎義治は一九二二(大正一〇)年五月一五日に茨城県水戸市に生まれた。三人兄弟の長男だったが、小学校五年生のとき、前橋の祖母の家の養子となつた。以来、下石倉町の住いが生涯の家となる。

こけしの絵付け日本一に

その後も、県展への出品は毎年欠かさず続けた。受賞も続き、第一〇回展からは無鑑査、第一七回展からは展览会委員を務め、一九六八(昭和四三)年に群馬県美術会が発足すると会員となつた。

健康が回復した一九五二(昭和二七)年には結婚。生活費を稼ぐためにこけしの絵付けを始めたが、絵の才能と持ち前の熱心さで、たちまち業界の新進作家として注目される。一九五四(昭和二九)年の全国こけし人形コンクールで第一位。翌年には第一位の総理大臣賞を受賞するまでになつた。

ところがまたしても病魔が岩崎さんを襲つた。今度は腎臓炎で、軌道に乗つた絵付けの仕事も辞めることになつた。

南城一夫を師と仰ぐ

岩崎さんが生涯の師と仰ぐ南城一夫に出会つたのは、一九五八年(昭和三三)年だそうだ。場所は語つていいが、展覧会場で南城作品を見て圧倒されたといふ。おそらく前橋中央通り商店街にある鈴木ストア一階のギャラリーで開催していた「五人展」に違いない。四年前から行われていた展覧会で、南城一夫、清水刀根、中村節也、神保和幸、横堀角次郎の五人によるグループ展だった。寡作で知られる南城が定期的に作品を発表する貴重な機会で、この時期南城作品を見たとすれば、この展覧会しか考えられない。

以前このシリーズでも取上げた南城一夫は、絵に対しあは厳しかった。作品が造形的に美しいだけでなく、そこに作者の心情が反映されていなければ絵として認められないと感じた。作品が造形的に美しいだけでなく、そこには深い意味がある。それが南城一夫の絵に対する考え方だ。

下石倉町の岩崎家から本町の馬場川沿いに住む南城家までは、利根川を越えてそれほど遠くない。岩崎さんが作品を携えて南城家を訪れる事が増えた。南城が一度だけ岩崎さんの絵を褒めたことがある。『古代瓦』という作品だそうだが、おそらく一九六二(昭和三七八)年の第一回県展出品作『かわら』だろう。

一九六五年(昭和四〇)になると、岩崎さんは県技術吏員の職を得て生活も安定した。

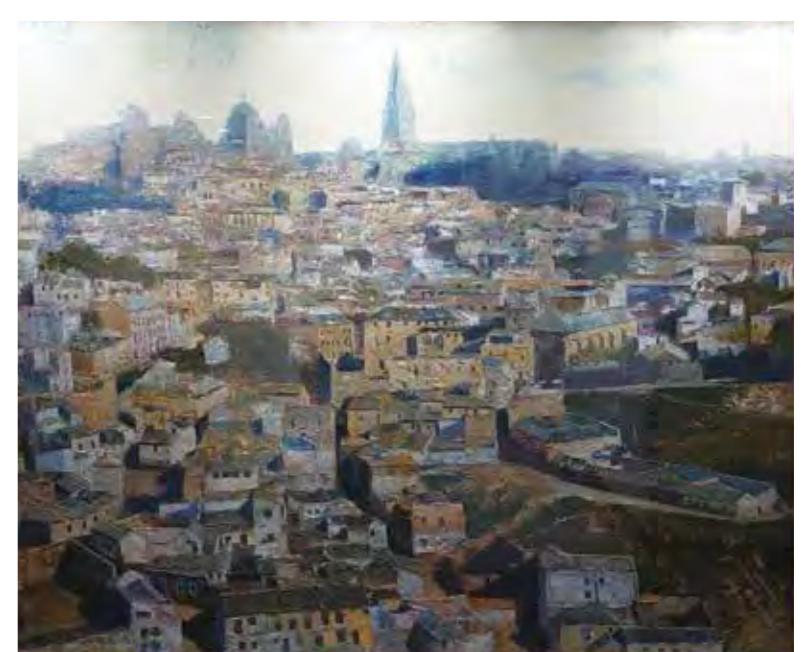
なかつた。

南城一夫にも赤城山を描いた作品が数々あるが、岩崎さんにとっても赤城山は生涯のテーマだった。岩崎家からすぐ近くの利根川西岸に立つと、坂東太郎の川越しに、さえぎるものもなく赤城山を臨むことができる。岩崎さんは季節ごとに表情を変える赤城山を、街並みや河原の描写にも手を抜かずに丹念に描いている。

同じ石倉町に住んだ詩人・萩原恭次郎の詩碑が群馬大橋のたもとに立つている。「汝は山河と共に生くべし」汝の名は山岳に刻むべし 流水に画くべし」と刻まれた詩文を、岩崎さんは自分自身への教えとしていた。

晩年の岩崎さんは、呼吸不全で酸素吸入器が手放せなかつたが、それでも絵は描き続けた。

二〇一〇(平成二二)年一月、ある医療情報誌で岩崎さんが紹介され、その表題には「多病息災」とあった。その月の二二日、岩崎さんは静かに息を引き取つた。享年八八歳。岩崎さんの心は、今でもヤマトの所蔵作品と共に生きている。



トレド風景

美術研究家 染谷滋

一九三九(昭和十四)年三月、旧制前橋中学を卒業。同級生には、後の衆議院議員で日本社会党の委員長も務めた田辺誠がいた。田辺は後年、岩崎の後援会会長を引受けている。級友の三割は戦争で亡くなつた時代だが、岩崎の前に立ちはだかつたのは病魔だった。

美術学校受験のために、デツサンの勉強に夢中になつたのが原因で肋膜炎を患い、一年近く病床に就く。美術学校はあきらめたが絵画への情熱は捨てられず、二科会の画家で前橋に青研社という画塾を開いていた清水刀根に師事して絵の勉強を続けた。その一方で、理研工業前橋製作所の事務職員として、終戦までの数年間を勤めた。

会社は終戦で解散となり、その一部が独立して創業されたのが大和工業株式会社、後の大和設備工事株式会社である。岩崎さんも創業時から関わったが、今度は腸結核を発病して退職せざるを得なくなり、榛名莊病院に入院して闘病生活に入った。

それでも岩崎さんは絵を描き続けた。一九五〇(昭和二十五)年、前橋で第一回群馬県美術展(県展)が開始されると、病院から絵を送つて見事入選した。

こけしの絵付け日本一に

その後も、県展への出品は毎年欠かさず続けた。受賞も続き、第一〇回展からは無鑑査、第一七回展からは展览会委員を務め、一九六八(昭和四三)年に群馬県美術会が発足すると会員となつた。

健康が回復した一九五二(昭和二七)年には結婚。生活費を稼ぐためにこけしの絵付けを始めたが、絵の才能と持ち前の熱心さで、たちまち業界の新進作家として注目される。一九五四(昭和二九)年の全国こけし人形コンクールで第一位。翌年には第一位の総理大臣賞を受賞するまでになつた。

ところがまたしても病魔が岩崎さんを襲つた。今度は腎臓炎で、軌道に乗つた絵付けの仕事も辞めることになつた。

南城一夫を師と仰ぐ

岩崎さんが生涯の師と仰ぐ南城一夫に出会つたのは、一九五八年(昭和三三)年だそうだ。場所は語つていいが、展覧会場で南城作品を見て圧倒されたといふ。おそらく前橋中央通り商店街にある鈴木ストア一階のギャラリーで開催していた「五人展」に違いない。四年前から行われていた展覧会で、南城一夫、清水刀根、中村節也、神保和幸、横堀角次郎の五人によるグループ展だった。寡作で知られる南城が定期的に作品を発表する貴重な機会で、この時期南城作品を見たとすれば、この展覧会しか考えられない。

以前このシリーズでも取上げた南城一夫は、絵に対しあは厳しかった。作品が造形的に美しいだけでなく、そこには深い意味がある。それが南城一夫の絵に対する考え方だ。

この頃、二科展に出品
1955 全国こけし人形コンクールで第1位の総理大臣賞
1958 南城一夫を讃り助言を受ける
1964 第25回県展で文部大臣賞、翌年から無鑑査
1966 第23回創元展で柏賞
1968 ヨーロッパやエジプトなど1ヶ月余り外遊
1974 前橋・焼乎堂で個展
1985 前橋青年会議所制作「前橋かるた」の原画を分担
1990 銀座・文藝春秋画廊で個展
1993 ヤマト・ギャラリーで個展
2001 ヤマト・ギャラリーで2度目の個展
2005 上毛新聞の特集「作家とふるさと」に取り上げられる
2009 「群馬の美術1941~2009」に選ばれて出品
2010 第60回県展で連続60回出品を達成
2011 1月22日、88歳で死去

敷島浄水場 旧配水塔

群馬県前橋市

前橋の上水道を支えた「水道タンク」

敷島浄水場の旧配水塔は、前橋市民から「水道タンク」の愛称で親しまれています。建築から90年以上経過し、令和三年四月に新しい配水塔が造成されました。

建設プロダクトのヤマトは、新配水塔の築造工事に携わりました。

昭和四（一九二九）年に配水塔が完成――――――

前橋市の水道は大正六年（一九一七）に水道の布設を要望する建議書が前橋市會議長に提出され、大正十二年に関東大震災が発生し、布設計画は無期延期になりました。水道の布設を望んだ前橋市民は、翌年の大正十三年に水道布設の促進陳情書を議会に提出し、大正十四年に内務省から布設の認可がありました。昭和二年に起工式が行われました。

配水塔は昭和二年（一九一七）に着工し、昭和四年（一九二九）に完成しました。基礎は鉄筋コンクリートの環状構造で、施工は直営でした。配水塔の水槽部は鋼鉄製で、鋼鉄の厚さは1.87cm、槽の上部は0.94cmです。水槽は直径約10.5mで、水槽の表面（鋼鉄）に断熱材を張り銅板で囲った構造です。水槽は、L字形鋼4本と鉄板で造った（ラチス構造）8本の柱で支えています。

配水塔の高さは避雷針を含めて37.4mです。配水池に貯められた水がポンプを使って配水塔に送られています。配水塔には892.6m³の水が入り、塔の水面までの高さは約28mです。鉄材には、当時の官営八幡製鉄所で作られた鉄が使用されています。

（参考資料：前橋市ホームページ・上水道の歴史）



「敷島浄水場の旧配水塔」

新配水塔と旧配水塔

新配水塔は、前橋市内の約18%にあたる地域に向け、安定して上水を供給する施設です。二〇〇九年の耐震工法指針に基づき設計されており、震度7クラスの地震にも対応できる施設です。災害時にはこの塔から直接水を供給することができます。塔の材質は錆に強いステンレスが採用され今後100年間の運用を予定しています。塔の高さは33.7m（ビルの11階に相当）、平時は1015m³（25mプール約2杯分）、災害時は3640m³（25mプール約7杯分）が貯水できます。

旧配水塔と前橋市水道資料館

前橋市水道資料館は、給水開始60周年（給水

開始は昭和4年3月21日）を記念して、平成元

年度に前橋市の水道発祥の地である敷島浄水

場内に設立されました。建物は、昭和4年に建

てられた敷島浄水場の旧管理事務所を改修し

たものです。建物の外観、内部などは、昭和初期

の雰囲気を生かしたつくりで、平成8年12月に

歴史的景観に寄与する近代建造物として、配水

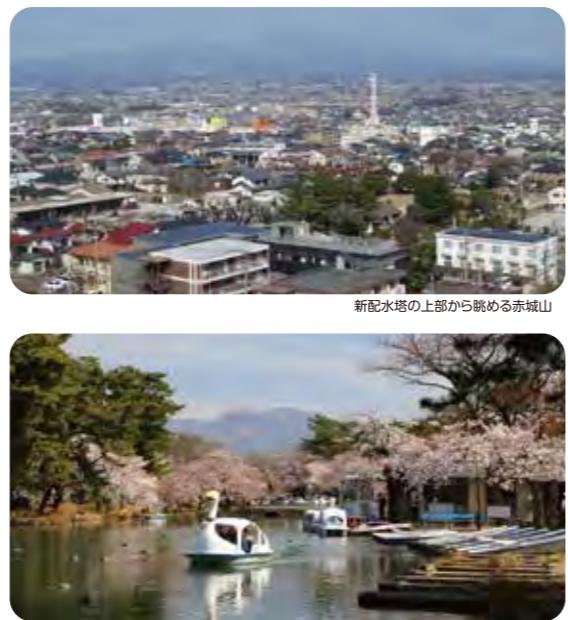
塔とともに文化庁から登録文化財の指定を受けました。近代水道百選にも選ばれています。

【現在休館中】配水塔・水道資料館に耐震補強が必要なため、耐震補強が終了するまでの間、水道資料館は休館しています。

住所：前橋市敷島町216



旧配水塔と前橋市水道資料館（写真提供：前橋観光コンベンション協会）



敷島公園の池（写真提供：前橋観光コンベンション協会）